



©岐阜県

今号の内容「普及に移した技術の紹介 Vol.2」

- 酒造好適米「ひだほまれ」の全量基肥施肥体系による省力栽培
- 中山間地域での栽培に適した青立ちの少ない大豆品種「里のほほえみ」
- クリ幼木の凍害発生程度と土壌物理性の関係

清流の国ぎふ

酒造好適米「ひだほまれ」の全量基肥施肥体系による省力栽培

【本所担当／可児友哉】

酒造好適米「ひだほまれ」の慣行施肥体系（基肥＋追肥）に対し、省力化をねらいとした全量基肥施肥（緩効性肥料を配合し追肥不要）の収量性や玄米品質、酒質を調査し、以下の結果が得られました。

【慣行施肥体系との比較結果】

1. 収量は同等。
2. 千粒重は0.7g低下し、やや粒が小さい。
3. 心白発現率が低下し、心白が減少。
4. 酒質は「ひだほまれ」の特徴を維持。

これらのことから、全量基肥施肥体系は同等の収量が期待でき、かつ品質にも問題なく、省力栽培技術として実用性が高いと考えられました。



「ひだほまれ」
・昭和56年に当所で育成。
・県内産ブランド日本酒の原料として利用される。

心白

玄米の中心が白く濁って見える

R2～3年度 試験結果

	収量 (kg/10a)	千粒重 (g)	心白 発現率 (%)	酒米分析 粗蛋白質 (%)	醸造試験 アミノ 酸度
慣行栽培体系	614	28.9	62.5	5.8	1.6
全量基肥肥料	626	28.2	44.4	5.5	1.5

中山間地域での栽培に適した青立ちの少ない大豆品種「里のほほえみ」

【本所担当／可児友哉】

県内中山間地域の大豆奨励品種「タチナガハ」は、青立ちの発生が多く問題となっています。そこで、「里のほほえみ」の栽培特性並びに青立ちの発生程度を調査し、以下の結果が得られました。

【「タチナガハ」との比較結果】

1. 青立ちが少ない。
2. 開花期、成熟期は同等である。
3. 8%多収である。
4. 大粒で、蛋白質含量が4%高い。

これらの結果から、「里のほほえみ」は県内中山間地域における栽培に適すると考えられました。

これにより、「里のほほえみ」は令和4年度から「タチナガハ」に代わり奨励品種に採用されました。



←青立ちとは莢は成熟し褐色になっているが、茎葉が青い状態のこと。発生すると収穫時の汚粒発生等で品質が低下する。



タチナガハ

里のほほえみ

百粒重：「タチナガハ」 32.2g
「里のほほえみ」 37.7g

「里のほほえみ」

育成地：農北農業試験場（現、東北農業研究センター）
交配組合せ：「東北129号」×「刈交0264MYF₆」
その他特性：ダイズモザイク病、紫斑病抵抗性あり

クリ幼木の凍害発生程度と土壌物理性の関係

【支所担当／荒河 匠】

クリでは、温暖化の影響等から凍害による幼木の枯死が増えており、改植が必要になるばかりでなく、成園化が遅れるため、産地拡大の大きな障害となっています。

そこで、凍害の発生に関わると考えられている土壌物理性に着目し、現地クリ園で凍害被害の少ない園と被害の多い園で根域付近の土壌物理性を比較検討しました。

【凍害被害の多い園の特徴（図1）】

1. 土壌の気相率（土中の空気の割合）が低い。
2. 土壌の透水係数（水の通しやすさ）が低い。
3. 土壌硬度が高い。

これらのことから、凍害発生には土壌物理性が影響していると考えられました。

この結果を踏まえて、現在、対策技術の開発をめざします（農林水産研究推進事業委託プロジェクト研究）。

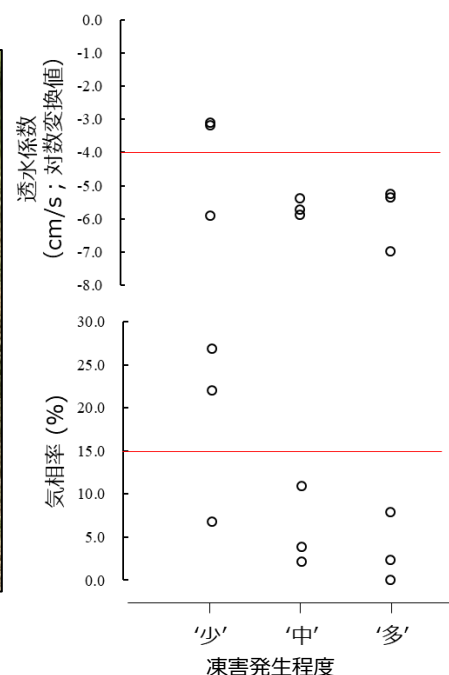


図1 凍害による枯死樹の様子（左）および凍害発生程度ごとの土壌物理性（右）

令和4年度 試験研究中間検討会を開催

新型コロナウイルス感染防止策を行ったうえで、3年ぶりに参集対面方式による中間検討会を開催しました。本所、支所それぞれ多数の参加をいただき、有意義な検討を行うことができました。



【本所(9月7日、参加者50名)】



【中津川支所(8月25日、参加者50名)】

岐阜県
中山間農業研究所

本 所 〒509-4244 岐阜県飛騨市古川町是重2丁目6番56号
TEL: 0577-73-2029 FAX: 0577-73-2751

中津川支所 〒508-0203 岐阜県中津川市福岡1821番地175
TEL: 0573-72-2711 FAX: 0573-72-3910

研究所ホームページ <https://www.k-agri.rd.pref.gifu.lg.jp/>